

## 「よく生きることについて」

### 1 序論

#### 課題文

「神々にとってはすべてのものが美であり、善であり、正であるが、しかし人間どもは、そのあるものを不正、あるものを正と考える。(ヘラクレイトス)」

正・不正の構造を探り、その根底にある「如何に人は生きるべきか」という問いをヘラクレイトスの言葉を参考にしながら考えていき、そこから「よき生き方」を提示していくのがこのエッセイの主題である。

### 2 本論

正・不正という言葉の意味は、ある事柄をなすべきか、またはなさないべきか、ということの意味している。そしてその基準となるのは人がそれぞれもつ人生の目的である。生命を守ることを信条とする人は、生物を殺すことを不正とするだろう。一方で生物を助けることを正とする。正・不正の基準は人により異なるため、ある人にとっては正であることもある人にとっては不正である。法を守ることを自分の使命であると考えた裁判官は、法を破ったものに時として死刑を課すこともある。これは生命を守ることを信条とする人間はこれを不正とするだろうが、裁判官はこれを正とする。

人生の目的とは人間の本質に深くかかわるがために個性的にならざるを得ない。人間はそれぞれ他人には理解もできない固有性を持つ。例えば感覚などは人それぞれのものであろう。(正確にはひとそれぞれのものかどうかさえわからないほど理解不能な、固有なものである。) それならば正・不正とは全く個別的で恣意的なものなのだろうか。

そうともいいきれない。確かに現代社会では人々はお互いの価値観を尊重し、ある意味あなたがいいなら私は構わないという感じすらあるほどだ。だが倫理的な問題は今も存在する。倫理とは個別的なものではなく普遍的なものではなくてはならない。もし人々が正・不正を全く個別的で恣意的なものとして納得しているなら倫理的な問題、ただ個別の正・不正を論ずるのではなく普遍的な正・不正を論ずる問題は存在しないだろう。

なぜこのような事態が起こるのだろうか。ここで私は人生の目的に関する一つの主張を取り上げたい。

人生の目的という問題、つまり正しい生き方を考えるとき、人はよく「～のために」という考え方をする。例えば私が勉強をしなければならぬと考えるのは、ある大学に行きたいからだ。大学に行きたいのは、研究者になりたいからだ。という具合だ。しかしこの思考は無限に続く。そこでこれを止めるためには第一原理とでもいうべきものが必要になる。つまり神がそう決めたからとか、そう世界はなっているからとかである。そしてここにある主張は次の一つの主張にまとめられる。「私がそう思うから」を第一原理とする主張である。そして以後それに疑問は持たずそこから世界を解釈し、正・不正を決定する。

これは一見真であるように思える。私が正と思うことは正である。根拠を無限に求める必要はないし

少なくとも私は納得できる。これは第一原理にふさわしいように思える。だがこの主張にはある前提が隠されている。それは「私は世界から独立した存在である。」という前提である。

普段人は自分が世界から独立した主体であると考えている。世界から分離し世界を一步引いた理性的な存在であると考えている。だがこれは正しくない。まず自分は世界と関わりを持ち、お互いが作用しあっている。私は決して独立してなどいない。世界の作用により私は新たなる私へと変化し続ける。これの具体的な例は、今現在私が正・不正について問うていることが挙げられる。もし私たちがただ世界を認識するだけで何らの世界からの能動的作用を受けないならば私達は問うことなど不可能だ。正・不正への疑問を抱くことは、自分の人生の目的、第一原理を疑うことである。これは先程とりあげた主張にでてくる、自分の持つ第一原理から世界を解釈し、それに対して無反省な私には不可能である。実際には世界により私たちの第一原理が揺さぶられている。

では私たちが正・不正、もっと言えば自分の生き方について最も深い疑問を持つのはいつだろうか。それは他人の死に出会ったときである。死とは捉えられないものである。それが周囲に及ぼす影響を知ることができるが、死と死んだ者との関係は捉えられない。そこでは二つの意識が私を襲う。一つ目は私が必ず死ぬという実感。二つ目はなぜ彼ではなく私が生きているのかという罪悪感である。

まず他人の死をみることは私に普段自覚しない生を感じさせる。生は私を在らせるものでありながら私が支配することのできないものである。生がいつ終わるのかもわからない。自殺という方法により生を縮めることもできるが、それは生を持って余すことであり、支配ではない。そして私の生は何百万もの生命により支えられている。私は生きる上で何かを殺さなくてはならない。死を通して私は生の性質を知る。生は私が支配できるものではなく、他の何百万の生により与えられたものであり、そして私だけの生ではないということを知る。

次にこの意識を持ったうえで、他人の死を見つめると、生をはく奪されたという意識を持つだろう。人が死んだのではなく、生が人から消えたのである。そしてそれは無作為である。病気であったから、事故にあったから等人が死んだ原因はわかるが、根源的な意味はわからない。そして私はその人がなぜ死んだのかと思い、なぜ私は生きているのかと思う。これは少し極端なケースかもしれないが、災害で肉親や親しい人を失った人ほど、いいかえれば突発的な人の死を経験した人ほどこのような意識をいだくようである。そして私達は死者への弁明を迫られる。死者が望む生を与えられながら、私達は正しい生をおくれているだろうか。

この瞬間に正・不正の問題、正しい生き方の問題は、私だけの個別的な問題ではなくなる。それは他人との生の間で考えられる必要がある。「私がそう思うから」を第一原理とする主張においては私という観点から正・不正が語られた。これでは正・不正の問題は恣意的なものになってしまう。一方で私よりも大きな生の観点から生・不正の問題は語られるべきだろう。ヘラクレイトスが「しかし人間どもは、そのあるものを不正、あるものを正と考える。」と書いたのは、私という小さな観点から正・不正を考えることを非難したものだだろう。世界の中に私があるのではなく、世界から切り離された私を想定し第一原理をもとに「そのあるものを不正、あるものを正と考える。」。正・不正の問題はもっと大きな立場から考えるべきだ。

では生の観点からみた正・不正とは、よく生きるとはどういうことだろう。そもそもなぜ私達は人生の目的が必要なのだろうか。人生の目的を第一原理としてしまえば、私はそれに基づいて世界を恣意的に解釈してしまう。それはただ私の生を生きるだけである。そして第一原理に支配される私は結果として主体性を失ってしまう。世間一般の説とは正反対だが私達はよく生きるために人生の目的を捨てなければならない。

これだけではただのニヒリズムのように思うかもしれないが、私は何も「～のために」ということを否定するのではない。それにとらわれてはいけないこと主張したいのだ。第一原理としての人生の目的は私を限定させ結果として生から遠ざける。私達はしばしば目的の奴隷となっている。仕事をするという目的が、いつの間にか私を支配し、私は仕事のための道具となる。しかし私達は世界との関係において人生の目的を反省し、自分のあり方を見つめなおすことができる。人生の目的を世界との関係の中で反省しつづけることが必要である。そしてそれにより私は人生の目的に支配された私から脱却し、真に生をいきるようになる。

つまり正・不正の問題は私達を、生を生きることから排除してしまうものであり、捨て去るべき問題である。しいて言うならば私ではなく生を生きることが正である。

生を生きるとは、生の、世界の一回性の中に生きることである。本来物事とは一回限りのものである。だが私達は人生の目的を基準として、それに都合の良いように世界を解釈する。その恣意的な生を映し出さない虚構の世界では未知のもの、第一原理を揺さぶるようなものを、排除・変容させる。つまり私達は人生の目的にとらわれれば、数百万の生の上に成り立ち、死者が渴望する生をいきるのではなくただその虚像を生きているのだ。人生の目的を捨て、世界に対して恣意を挟まず受動的であることにより初めて生を生きることができる。そしてそれは死者への、私の生となった何百万の生への弁明となるだろう。

「神々にとってはすべてのものが美であり、善であり、正である」とは次のことを意味する。正は人間の正・不正から離れたものであり、しいて言うならば生を生きることである。神々は自己を離れている。それにより世界の一回性の素晴らしさ（この瞬間の私も一回限りの私である）＝すべてのものが美であり、善であり、正であることに気づくことができる。人生の目的にとらわれていた私にとっては不要であった一回限りの未知の要素を歓迎し、私という限定された存在から無限の生へと還ることができるからだ。

### 3 結論

人間の正・不正は人生の目的という第一原理にとらわれた結果であり、それは私を私に限定し、生を生きることが不可能にする。逆説的だが人生の目的を捨てたり、それにとらわれないことにより私は真に生を生き、世界の一回性の素晴らしさに気付くのだ。